

高知医療センターHP:<http://www.khsc.co.jp/>



「患者さんが主人公の病院をめざして」

高知医療センターの基本理念

1. 患者さんが主人公の病院にします
2. 高度な医療を普段着感覚で提供します
3. 自治体病院としての使命を果たします

目次 CONTENTS

クローズアップ ②

- 専門外来：女性泌尿器

各センター紹介

- 救命救急センター ③
- 循環器病センター ④
- 総合周産期母子医療センター ⑤
- がんセンター ⑥

- 地域医療センター：症例報告 ⑦

地域医療連携病院のご紹介 ⑧

- お知らせ
- 編集後記

◆ 外来診療時間 ◆

午前8時30分～正午
午後1時～午後4時30分

クローズアップ — 専門外来：女性泌尿器 —



充実した女性泌尿器外来をめざして

泌尿器科医 那須 良次

泌尿器科疾患に悩む女性患者さんに対して、泌尿器科専門医の女性医師が診察にあたる女性泌尿器外来を平成16年4月、当時の高知中央病院に開設しました。

中央病院での女性泌尿器外来の試行期間中、新患者数は31人でした。主訴は尿失禁12人、頻尿7人が最も多く、次いで尿潜血3人、残尿感2人、排尿困難2人でした。疾患別患者数は尿失禁10人(切迫性5人、腹圧性3人、混合型2人)、尿失禁を伴わない過活動膀胱6人、神経因性膀胱2人、膀胱瘤1人、間質性膀胱炎2人などでした。

尿失禁や頻尿、更年期障害など、女性特有の悩みをもっている人は非常に多く、女性にとってとかく

敷居の高い泌尿器科でしたが女性スタッフによる診察により気軽に泌尿器科に受診していただくことが可能になりました。今後、女性専門外来の社会的ニーズはさらに拡大していくものと考えられます。

現在、医療センターでは毎月第1火曜日の午後、1時から4時に女性泌尿器外来を行っています。女性患者さんで女性泌尿器科専門医の診察を希望される方は症状、疾患にかかわらずご紹介いただければ幸いです。外来はじっくり話を伺うために30分にひとりの予約枠としています。担当は岡山大学医学部附属病院の井上 雅医師です。大学でも女性泌尿器外来を担当しています。

総合診療科、女性総合外来、婦人科などとの連携を深め、充実した女性泌尿器外来をめざしています。



井上 雅 (いのうえ みやび)

非常勤医師、女性泌尿器科外来担当

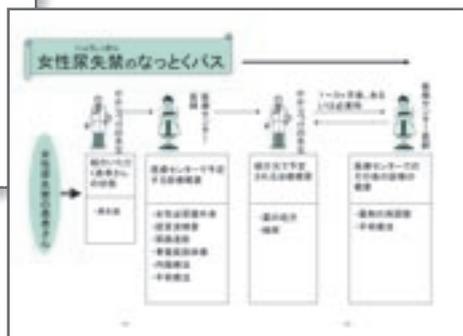
平成11年 高知大学医学部卒業

11年 岡山大学泌尿器科学教室入局

専門 女性泌尿器科疾患

日本泌尿器科学会専門医

女性泌尿器のパス手帳



高知医療センターでは、現在9疾患のなっとくパス手帳があり、今回ご紹介した女性泌尿器用のパス手帳もあります。各パス手帳をご希望の際は、高知医療センター・地域医療連携室までお問い合わせください。ご希望のパスをお手元に送らせていただきます。

地域医療連携室

Fax:

088 (837) 6701

救命救急センター

救命救急センターは、24時間365日受入の体制をとり、通常の重症救急患者さんだけでなく、広範囲熱傷や指肢切断、急性中毒などの特殊な医療にも積極的に対応します。また、総合周産期母子医療センターと協力して母胎搬送を含めた産科救急、新生児小児救急にも対応しています。

「救急医療は医の原点である」、「すべての救急患者さんに対して高度な救急医療を提供する」——この福田充宏センター長の理念を実践していくために、高知医療センターのすべての医師が救急医療に関わっています。

救命救急センターの構成は、救急外来部門（重症処置室3床・診察室5床・経過観察ベッド7床）、治療室部門12床（ICU/CCU）、HCU部門8床、院内ICU部門8床（集中治療室、術後回復室）です。

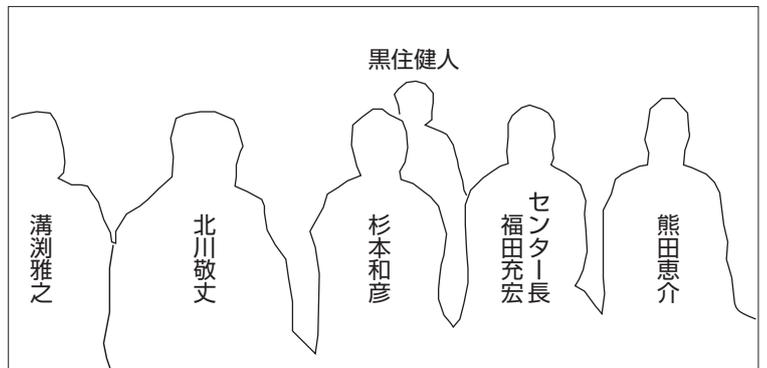
救命救急センターに関わる職員としては、救命救急センター専任医師10名・兼任医師56名、それ以外の医師は全員が協力医師として、看護師は、ICU/CCU/HCU/救急外来に57名、院内ICUに32名が配置されています。

また、専任薬剤師、専任管理栄養士も配置され、診療放射線技師・臨床検査技師・臨床工学技士がオンコール体制などでスタンバイしています。その他、医事担当の事務員なども含め、救命救急センターに関わるすべての職員は、毎朝・夕に行われるカンファレンスに参加して、チーム医療の実践を行なっています。

救命救急センターは、三次救急医療機関としての患者さんの受入に加え、県の「へき地医療拠点病院」「基幹災害医療センター」としての役割をもっています。

二次医療圏を越えた高知県全域の医療を支援する役割として、高知医療センター内のくろしおホール（216名収容）等を利用して、毎月1回「救命救急センター症例検討会」を開催しています。そこでは、へき地医療支援室との連携でへき地医療機関を結んだブロードバンドを活用して、センター内外の医師・看護師・救急救命士・消防防災航空隊員など多くの職員が参加をした救急症例検討会を実施しています。

また、高知医療センターの屋上には非共用ヘリポート（31.5m×28.5m）が備えられています。3月のオープン以降10月末日までに、76件の県内外各地からの重症救急患者さんのヘリコプター搬送実績をあげています。これらヘリコプター搬送は平素の救急医療だけではなく、今後予想されている南海大地震など大



規模災害時の被災者搬送にも大いに活躍が期待されています。そのような意味からも、救命救急センターは県の消防防災航空隊をはじめ関係各機関との連携を密にし、ヘリコプターを利用した災害時への対応を整えています。

「救命救急ワークステーション」——救急車受入口向かいに設置しているこの施設は、高知医療センターが救急医療の研修病院の役割を担っていることから、救急救命士をはじめとして救急医療に関わる人たちの研修所として利用されています。オープン以降、この救命救急ワークステーションに多くの方々を受け入れ、病院前救護の医療の質確保を図るため、研修が積極的に実施されています。

救命救急センターに来院された患者さんは、10月末日現在9,293人にのぼり、そのうち2,231人が入院されました。また、来院患者さんのうち1,145人の患者さんは地域のかかりつけ施設からの紹介患者さんでした。

こうして救命救急センターは、ハードとソフト両面の体制の整備を今後とも続けながら、急性期病院の核として地域から求められる救急医療の提供を行なっています。

循環器病センター

循環器病センターは、長年にわたり高知県の循環器病診療を支えてきた歴史ある旧高知市立市民病院循環器内科、心臓血管外科と旧高知県立中央病院の循環器内科が合併し、今まで以上に高度な循環器治療、さらには高知県下全域で平等に高度な救急診療を受けられるよう強力な救急循環器診療体制を敷いて開設しました。

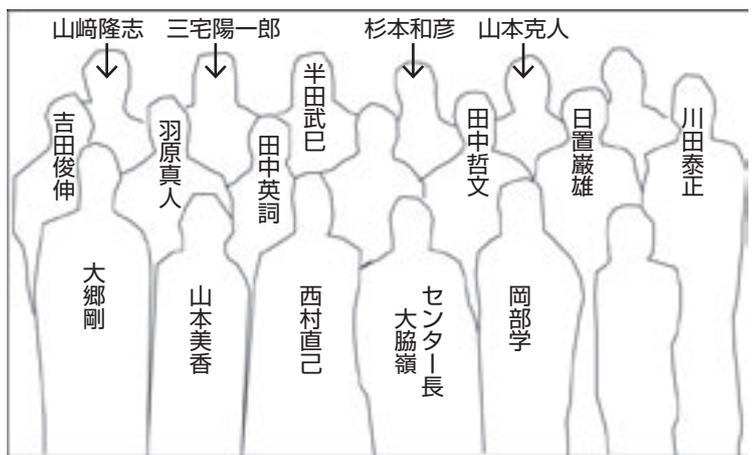
循環器疾患は心筋梗塞、不安定狭心症、心不全、不整脈、解離性動脈瘤などの重症救急疾患が多く、緊急治療の対象になる場合が多くあります。また安定しているようにみえても、病態が急変し、救急医療を要する可能性があります。これらの病気では急性期に死亡することもあります。迅速かつ適切に治療を行えば、救命のみならず社会復帰も可能となります。

高知医療センターでは、夜間、休日でも救命救急センター所属の循環器科担当医が1年365日24時間、直通の携帯をもって待機しています。常に救急カテーテル治療(緊急経皮的冠動脈形成術)や緊急手術が可能となっています。

循環器疾患は一刻を争う疾患も多く1分1秒が死や重篤な合併症につながる場合も多くあります。本センターでは積極的にドクターヘリでの搬送をおこなっており、高知県全域が搬送30分圏内にあります。これにより、県民全員が等しく高度な救命治療を受けることが可能となっています。

入院フロアは重症で緊急な循環器疾患治療目的のCCU(冠動脈疾患集中治療室:Coronary Care Unit)が4床、救命後の高度なケアを必要とする患者さんのためのHCU(高度集中資料室:High Care Unit)が8床(全室個室)あり、病棟も充実しています。心筋梗塞や心臓手術治療後は心臓リハビリテーションを行い、可能な限り早く日常生活、社会復帰が可能となるように努力しています。これからの治療方針に関しては、患者さんにとってベストな治療を行うために、循環器科と心臓血管外科が密接に協力して患者さんについて検討をし、最善の医療技術を提供します。

また、救急疾患だけでなく、高血圧・高脂血症等の生活習慣病や、虚血性心疾患(狭心症)、心不全、不整脈などの慢性循環器疾患の診断、治療にも力を注いでいます。近年、循環器病治療の進歩は著しく、とくに救急医療における進歩は目覚ましいものがあり、今までの方法に安住することなく患者さんの負担の少ない低侵襲検査、治療を行うようになってきました。



循環器内科としては、心臓超音波による非侵襲的検査、心臓カテーテル法を用いた狭心症・心筋梗塞の治療(風船治療、ステント治療)や、心臓カテーテルを用いた不整脈の横治療(カテーテルアブレーション)、ペースメーカー治療(恒久的ペースメーカー植込み術、心不全に対する両室ペーシングなど)、植込み型除細動器による致死的不整脈の治療、カテーテルを用いた弁膜症治療(僧帽弁狭窄に対する経皮的交連裂開術)、心拍停止や重症心不全の患者さんで使用される大動脈バルーンポンピングや経皮的人工肺補助装置による治療などがあげられます。

心臓血管外科では心拍動下低侵襲冠動脈バイパス手術、自分の弁を温存する弁形成術、無輸血手術、また隔離性動脈瘤に対する人工血管置換術など低侵襲手術に積極的に取り組み、全国トップクラスの成績をあげています。

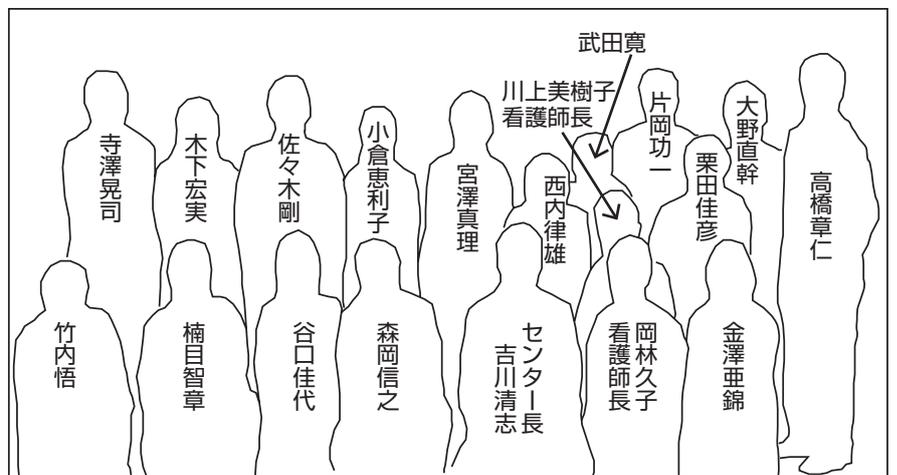
高度な専門医療も大切ですが、旧高知市立市民病院、旧高知県立中央病院から受け継いだ患者さんが気軽に相談できる体制はなくさず、常に患者さんのコンサルタントであることも心がけています。

総合周産期母子医療センター

総合周産期母子医療センターは、周産期救急、新生児・小児救急の応需体制の構築、基礎疾患を持つ妊婦さんの総合的な管理、超低出生体重児への対応、先天性奇形への対応など、一般の医療機関では対応困難な症例を含め、妊婦さんから小児までトータルとしての医療を高知県全域に提供しています。

そこで、高知医療センターとして全県的な対応が求められることから、独自に緊急患者搬送車を準備し、総合周産期母子医療センターと救命救急センターとの連携を図り「かかりつけ医」との連携も密にするとともに、24時間県内のどこの新生児搬送にも対応できるようにしています。

また、産科・小児科病棟の入院機能のほか、産科外来・周産期に対応した集中治療機能を集約し、センターとしての機能を最大限に発揮できる体制を整えています。



Q. 総合周産期母子センターではどんなことをしますか？

妊婦さんには……

1. 産科医を中心に高知医療センターの各科専門医が協力して、妊婦さんの管理をします。
2. 他病院や診療所と連携を保ち、急変した妊婦さんの受け入れを24時間365日行います。
3. 重症妊婦さんは、母体胎児集中治療室(MFICU)で治療します。
4. 陣痛・分娩・回復まで居室型分娩室(LDR)で正常なお産も行います。

胎児には……

1. 産科医の指導のもと、母体を良い状態に保ちます。
2. 胎児の状態をしっかりと監視します。
3. 産科医と新生児科医が相談し、胎児の状態が改善しなければ、早めにお産をして新生児医療を行います。在胎26週以後は90%以上は助かります。

新生児には……

1. 重症新生児は新生児集中治療室(NICU)で高度医療を行います。
2. 小児外科、心臓血管外科、脳外科、整形外科、形成外科などで新生児の手術を行います。
3. 正常新生児には母乳育児の推進・母児同室を行います。

その他

1. 心のケアを大切にし、カンガルーケアやNICU卒業生の会を行っています。多胎児の家族会、気楽なお茶会、産後の電話訪問なども予定しています。
2. ドナルド・マクドナルド・ハウスこうちが利用できます。一人1泊1,000円です。

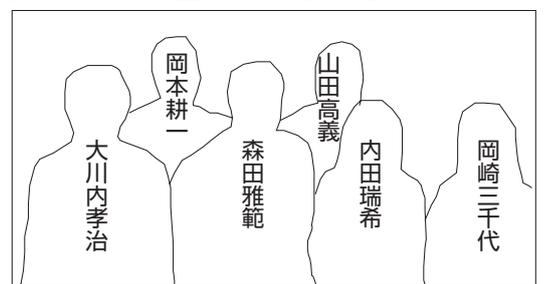
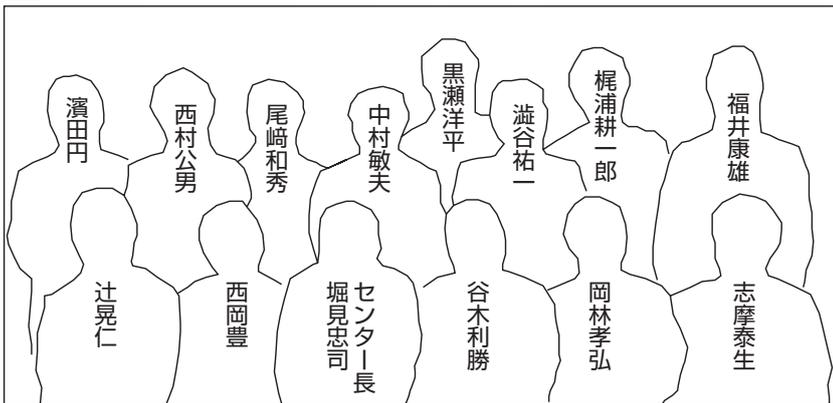
がんセンター (消化器グループ)



齋藤雄一

八木誠

北川敬丈



高知医療センター開院後、診察したがん患者さんは、旧高知市立市民病院と旧高知県立中央病院とでの患者さんの数をはるかに超えて増えています。これは、両病院の統合による相乗効果と同時に県民および県下の医療施設から「がんセンター」として期待され、それに信頼される度合いが非常に高いものであることを示していると思われます。両病院はそれぞれ、これまで年間2,000例たらずの手術数をこなしていましたが、高知医療センターでは3カ月の手術数は1日20例以上、年間に換算すると5,000例を超えることが想定されます。

この症例数の増加は、両病院の統合だけが原因ではないことも明らかになりました。その一つは「救命救急センター」の存在があります。いつでも、どのような状態でも対応できる救急応需体制が整っていることが、その原因であると考えられます。通常はがん患者さんは救急患者さんではありませんが、高知医療センターの治療を受けると、術後や経過観察中に何か急に心配なことがあっても、救命救急センターでカバーしてもらえるとという安心感が広がっているようです。

がんセンターの機能を高めているもう一つの理由は、医師たちのチーム医療の充実をあげることができます。それぞれの診療科に属しているすべての医師を対象に、診療科にこだわることなく、診療部長などの階級区別もなく、異なる診療科の医師たちが患者さんについての相談や、医師同士のお互いの報告、あるいはいろいろな連絡などが、気軽にしかも簡便にできています。

また、胃がん、肝がん、肺がん、結腸がん、直腸がん、乳がん、卵巣がん、子宮がんなどは高知県に多いのですが、高齢化率の高いという地域性も関係して、とくに循環器系の合併症などが多いことも高知県のがんの特徴になっています。いろいろな診療科の医師同士が密接に連携することによって、高い安心感のなかで、がんの手術前の検査や手術後の管理などが行われるようになったことも「がんセンター」機能の充実につながっています。

最近、我が国では、全人的な質の高いがん医療を受けることができる体制を確保するための施策を打ち出しています。その施策には、がん医療の均てんを図り、地域差や医療施設の格差をなくすための具体的な内容が示されています。それが「地域がん診療拠点病院」の整備になります。もちろん、本センターは旧高知県立中央病院から引き続き、高知県内では唯一の「地域がん診療拠点病院」として積極的に活動をしています。その最も大きな活動の一つが、地域格差をなくすための地域医療連携になります。

さらに、がんセンターでは、患者さんおよびご家族の支援を目的として、「がん社会学」を主題とする研究テーマを掲げています。がんの正しい知識と、高知県のがん医療の社会的な状況について、患者さんたちに役立つような冊子の作成も考えています。各種がんの「患者の会」などを立ち上げて、「患者の会」と私たち医療者と定期的な研修会や懇談会などの開催も予定しています。

地域医療センター：症例報告

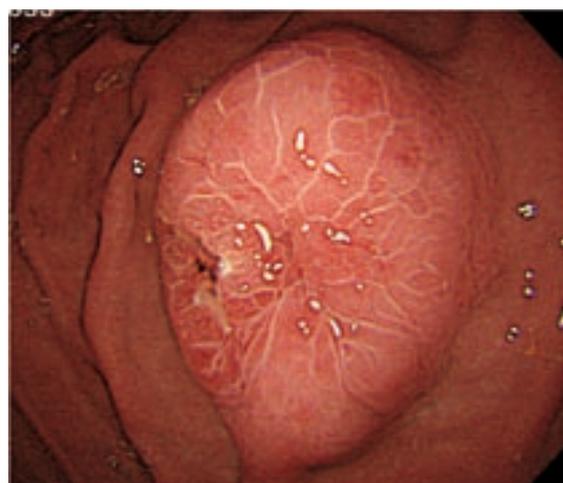
症例 その近傍腫大リンパ節が、並存した胃MALTリンパ腫と類似の組織所見を呈した盲腸癌の1例

81歳男性。5年前に幽門部潰瘍の治療歴あり。2ヶ月ほど前から時々、右下腹部痛がある。腹痛は間歇的で排便で軽快するが、増悪傾向あり。嘔気・嘔吐なし。近医の上部消化器管内視鏡検査で特記すべき所見なく、さらなる検査を求めて紹介、来院された。

図1 本センターでの内視鏡検査所見

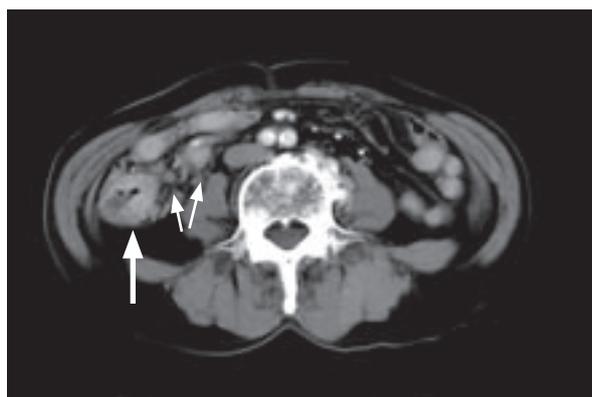


盲腸癌

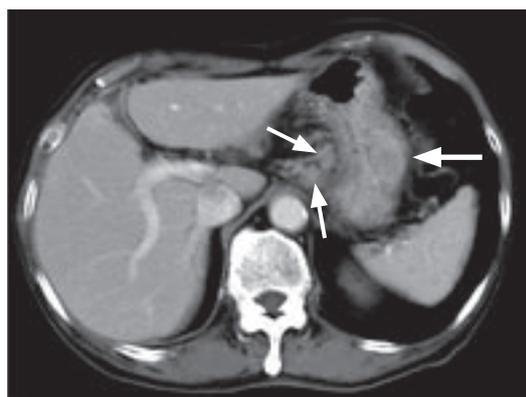


胃粘膜下腫瘍様腫癌性病変

図2 本センターでのCT検査所見



盲腸腫瘍とリンパ節腫大



胃腫癌性病変とリンパ節腫大

本センターでの治療内容

本センターの胃内視鏡で体上部大彎後壁に粘膜下腫瘍様の隆起、大腸内視鏡で盲腸癌と診断。腹部CTで共に近傍リンパ節に腫大を認めた。手術後の組織は胃腫瘍のMALTリンパ腫で、リンパ節は反応性過形成に対し、盲腸癌の近傍リンパ節は癌転移でなく、胃腫瘍に似た massive crystal-storing histiocytosis の所見を呈していた。

《第1回 高知医療センター・外科グループ手術症例検討会(10月18日(火)くろしおホール)より》

地域医療連携病院のご紹介



地域医療支援病院 医療法人近森会 近森病院



〒780-8522 高知市大川筋1-1-16
 電話:088-822-5231 (代)
 FAX:088-872-3059
 URL:http://www.chikamori.com

(診療科)

内科、循環器科、消化器内科、神経内科、呼吸器内科、整形外科、外科、小児外科、形成外科、呼吸器外科、消化器外科、脳神経外科、心血管外科、放射線科、麻酔科、泌尿器科、リハビリテーション科

(関連施設)

総合心療センター近森(近森病院第二分院、高知メンタルリハビリテーションセンター・メンタルクリニックちかもり、訪問看護ステーションラポールちかもり、援護寮まち、地域生活支援センターこうち)、近森リハビリテーション病院、在宅総合ケアセンター近森(リハビリテーションクリニックちかもり、介護老人保健施設いごっばち、訪問看護ステーションちかもり、ホームヘルプステーションえのくち、在宅介護支援センターえのくち、配食サービスセンターちかもり、テクノエイドセンター)

近森病院(338床)は、高知駅から徒歩3分という高知市の中心部に位置し、平成15年に高知県で初めて地域医療支援病院として承認されました。昭和21年近森外科開設時から、今日まで60年の歴史を持ちます。今回、地域医療連携室の日浦利恵看護師長と医療相談室の野村真紀室長にお話を伺いました。

地域医療支援病院として、主に前方支援に地域医療連携室の看護師2名、事務員1名、後方支援にMSW7名のスタッフで担っています。看護師の専門性を発揮することで紹介時の急な対応も可能となり、また看護師、事務員、MSWが同じ部屋で活躍することにより、院内外の連携もスムーズです。

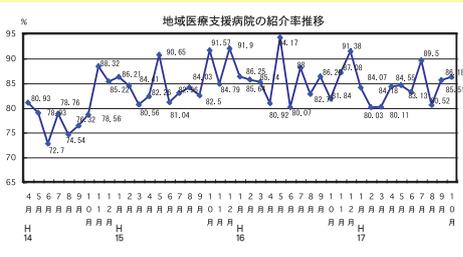
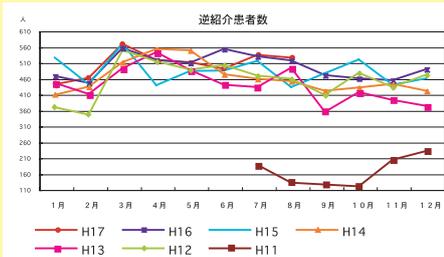
複数の送迎車もあり、急性期から回復期、在宅までを見据えた複合施設など、豊富な連携資源があり、患者さんや医療機関の高い利便を実現しています。訪問活動によりフェイスツーフェイスの関係を築くなど、近森病院の持つ連携医との強い

ネットワークは、長い地道な努力のたまものです。また今夏からの「高知県地域医療ネットワーク」の立ち上げへの尽力など、地域医療の積極的な貢献を担っています。

院内誌「ひろっば」「ホットライン」「ゆうと通信」などを通じて、病院のコンセプトなども積極的に公開し、院内外を対象に講演会や研修会を頻回に行っており、毎回多くの方に参加していただいています。

下記のグラフに見るように、患者さんの紹介率は常時80%台を、逆紹介患者数は月400~500名をキープして、地域の先生方との連携を図っています。ここに近森正幸院長の姿勢が現れているようです。

インタビューをとおして、院長の強いリーダーシップと信頼のもと、職員間の強い連携が患者さん、各連携医、そして近森病院をつなぐ要となっていると感じられました。



業務多忙のなか、早く取材に応じていただき、ありがとうございました。

編集後記

日増しに寒さがつゆのり、朝起きるのがだんだんと辛くなる季節になりました。

今回の高知医療センター地域医療連携通信「にじ」第2号はいかがだったでしょうか?今回は各センター機能と各センター医師のご紹介をメインにさせていただきました。高知医療センターのことを知っていただき、もっと身近に感じていただきたいと思います。それが今後、地域の医療機関のみならずと高知医療センターとの連携のお役に立ち、患者さんにとって良い医療の提供となれば幸いです。これからも、みなさまにいろいろな情報を提供していけるよう、日々努力をしていきたいと思っています。まだまだ始まったばかりですが、これからも「にじ」をよろしく願います。ご意見等がございましたら、是非お聴かせいただきたいと思います。

(編集委員 尾崎)

お知らせ

第1回地域医療(内科系)症例報告会

12月15日(木) 午後7時~9時
 場所:高知医療センター2F くろしおホール
 (詳しくは、別途差し込みをご覧ください。)

高知医療センター救命救急センター症例検討会

12月20日(火) 午後5時半~
 場所:高知医療センター2F くろしおホール
 (テーマ:脳神経外科疾患について)

地域医療連携通信

にじ 第2号

平成17年11月30日発行
 発行責任者:瀬戸山 元一
 発行元:高知医療センター・地域医療連携本部
 編集人:地域医療連携通信編集委員・特別編集委員

高知医療センター地域医療連携室

〒781-8555 高知県高知市池2125-1
 TEL:088-837-6700
 FAX:088-837-6701
 E-MAIL:khsc0001@khsc.or.jp

